

保育士の描く保育士像と保育者の発達

成 田 朋 子

I はじめに

第2次世界大戦終結後間もない1947(昭和22)年に制定され、その後およそ半世紀の間1度も改正されることがなかった児童福祉法は、近年の子どもをとりまく環境の急激な変化によって、1998(平成10)年遂に改正されることになった。

ここで子どもをとりまく環境の変化とは、近年の社会経済構造の変化、少子高齢化の進展により、子どもを育てることが、本来の自然な営みではなくなってきたこと、つまり、子育てがかつてなく難しいものになってしまい、子どもが子どもらしく成長発達することが難しくなってしまった現状を指すと考えられる。したがって子どもの福祉を考える際にも、子どものみを視野に入れた福祉では、もはや子どもの望ましい発達は望めなくなってしまったのである。子どもが育てられる家庭を視野に組み込むことなくしては子ども本来の成長発達が保障できなくなっており、子どもに対してだけでなく家庭にも社会の手を差し延べることが必要になったのである。

このような状況から児童福祉の基本理念が「子ども福祉」から「子ども家庭福祉」へと大きく転換することになり、児童福祉法が改正されることになったのである。

この児童福祉法改正に伴い、保育所保育のガイドラインである保育所保育指針も1998(平成10)年に改訂されている。

児童福祉の基本理念が「子ども福祉」から「子ども家庭福祉」へと大きく転換したことは、保育所保育指針では、「第1章 総則」に明確に『子どもを取り巻く環境の変化に対応して、保育所には地域における子育て支援のために、乳幼児などの保育に関する相談に応じ、助言するなどの社会的役割も必要となってきた。』との文言が付け加えられたこと、また、「第13章 保育所における子育て支援及び職員の研修など」の2 地域における子育て支援 の(3)乳幼児の保育に関

する相談・助言」に『保育所における乳幼児の保育に関する相談・助言は、保育に関する専門性を有する地域に最も密着した児童福祉施設として果たすべき役割であり、通常業務に支障を及ぼさないよう配慮を行いつつ、積極的に相談に応じ、及び助言を行うことが求められる。』との文言が加えられたこと等に現われている。

さらに発達段階区分毎にも、例えば「第4章 6か月から1歳3か月未満児の保育の内容」の2 保育士の姿勢と関わりの視点」には『……愛情をこめて、応答的に関わるようにする。家庭との連携を密にし、1日24時間を視野に入れた保育を心がけ、生活が安定するようにする。』等と詳細に記述され、どのように子ども家庭福祉を進めていくのが丁寧に示されている。

そして、このような児童福祉に対する理念の変化に伴って保育職への社会的関心が高まったことと、以前よりあった男女共通の名称が妥当であるとの動きから、1999(平成11)年には「保母」という名称が「保育士」に変更されることになった。

その後、さらに2001(平成13)年には児童福祉法が一部改正され、「(保育士の定義)第18条の4」に、『保育士とは、第18条の18第1項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう。』と明記されることとなった。これは、保育士の名称独占資格化が明記された点、保育士に求められる役割・機能の範囲を「児童の保育」から「子育て支援」にまで拡大することが明記された点において重要である。

保育士の役割や機能について保育所保育指針では、先に述べた文言が追加された個所だけでなく、第3章から第10章すべての章に「保育士の姿勢と関わりの視点」を設け、すべての保育士が保育士の役割や機能を自覚できるような配慮がなされ

ている。また、保育士に求められる役割・機能の範囲が拡大したことによって、各保育士自身、その専門性に関して研鑽を積むことが要求されると思われるが、このことについても「第1章 総則 1 保育の原理 (2) 保育の方法」に『保育士は常に研修などを通して、自ら、人間性と専門性の向上に努める必要がある。また、倫理観に裏付けられた知性と技術を備え、豊かな感性と愛情を持って、一人一人の子どもに関わらなければならない。』と明記されている。

以上のような社会の変化によって児童福祉の基本理念が変更され、保育士の存在が社会的に認知されることになると思われるが、その分、保育士の社会的責任はかつてない程重くなっているといえるだろう。このような動向に伴って、保育士資格に関する研究も行われているところである⁽¹⁾。

では、この保育士に求められる役割、子どもに対しての、また保護者にたいしての役割を保育者自身はどのように受けとめているのだろうか。間接的にはあるが、現職の保育士からうかがい知る機会を得たのでそこから読み取ってみたい。また同時に保育者の発達についても考えてみたい。

II 保育士の描く保育士像

1 方法

愛知県では、2002（平成14）年度より、県内国公立を除く私立保育士養成所が参加する「愛知県現任研修運営協議会」に委託して、現職の保育者を対象にした研修を行っている。保育所を円滑に運営し、多様なニーズ、地域の子育て支援などに対応できる保育士の指導者を養成するための愛知県独自の研修であり、研修の期間は園長・主任

コースが50日間、中堅コースが20日間である。

筆者は2002（平成14）年度は園長・主任コース及び中堅コースにおいて、2003（平成15）年度は園長・主任コースにおいて、2004（平成16）年度は中堅コースにおいて、いずれも「発達心理学」を担当した。受講者はある一定年数以上の経験を積んだ現職保育士ばかりである。

筆者の講義では、生涯発達の視点から人生のスタートにあたる乳幼児期の重要性を述べ、乳児期及び幼児期前半に、子どもの心に愛着を芽生えさせることが何よりも大切であることを再確認してもらった。そして子どもの発達の特徴として、子どもは主体的存在である、子どもの行動にはすべて一つ一つ発達の意味がある、発達のみちすじは一定である、発達のあらわれ方は一人一人異なる、子どもはまわりの人とのふれあいの中で育つ、以上の5点をあげ、これらの特徴を念頭に置いて保育することの大切さを伝えようとした。

そして、子どもが様々な人との関わりの中で発達することについて、キーになる人との関係を、図1⁽²⁾を用いて説明した。

図1は、かつて筆者が幼児を観察する中で、子どもは、父母と共有していた漠然とした世界から、まず父母を分化させ、次に友だちをやや分化させ、さらに3歳を過ぎ、幼稚園という集団生活を経験する頃になると、幼稚園の先生や複数の友だちを分化させるという過程を図式化しようと、園原(1966)⁽³⁾の自我の芽生えの図式を発展させて作図したものである。

ところで図1には保育士は登場していない。現在の我が国では3歳未満児の子どもは多くは家庭で育てられていることから、図1では、集団保育の保育者として幼稚園教諭を代表させたからであ

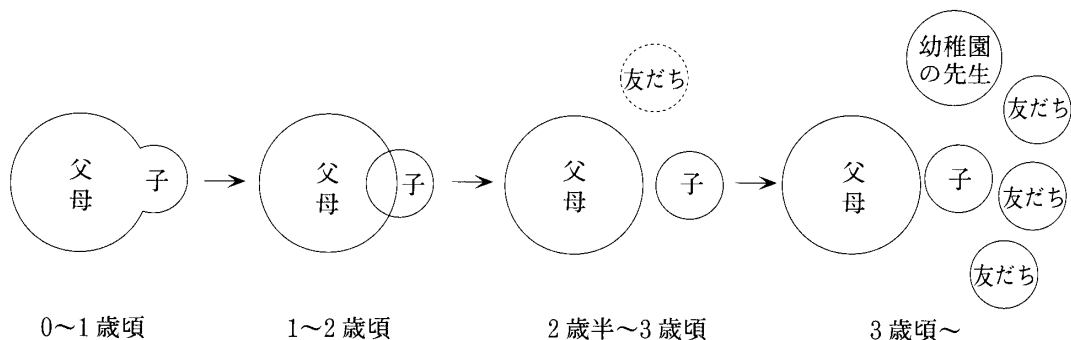


図1 自分、まわりの大人・友だちの分化

る。—— 因みに名古屋市の場合、2004 (平成 16) 年 5 月の調査⁴⁾によると 3 歳未満の子どもの約 84 % が家庭で育てられている。講義時、筆者が保育士を含めた図を示して説明を加えてもよいのであるが、受講生に保育士の役割について主体的に考えてもらう機会にしたいと思い、敢えて以前に作成した図で説明をした。

時間の関係もあり、説明をここで打ち切り、各自考えるよう、そして図 1 に保育士を加えた図を作成し提出してもらうことを指示し講義を終えた。

2 結 果

筆者が講師を務めた 2002 年度から 2004 年度の中、2003 年度は説明のみで課題を課さなかったので、2002 年度 42 名分と 2004 年度 30 名分のレポートを分析の対象とした。

1) 描かれた保育士像のタイプ

それぞれに苦心した跡の見られる作図であるが、72 名の図を大きく 3 つのタイプに分けることができた。

① 父母と同じスタンスで子どもに接する保育士像

図 2、図 3 のように、父母と同じスタンスで子どもに接する保育士像が描かれている。

図 2、図 3 とも 2 歳頃までの図では、子どもを真中にして父母を鏡で映した位置に保育士が描かれている。2 歳半～3 歳頃の図は、保育園で子どもの仲立ちとしての役割を意識してであろうか、子どもおよび友だちと接点をもつ図が描かれている。また、図 3 では父母との協働を意識したのであろうか、父母とも接点のある図が描かれている。

なお作図のいくつかにはコメントが添えられていた。父母と同じスタンスの保育士像を描いた理由として、「乳児保育が必要とされている現代、0 歳児から関わっている保育士の存在は父母とともにまわりの大人として子どもを支えていく必要がある。」、「親と保育士は共同体になることで子どもは育つ。」等の説明が添えられていた。

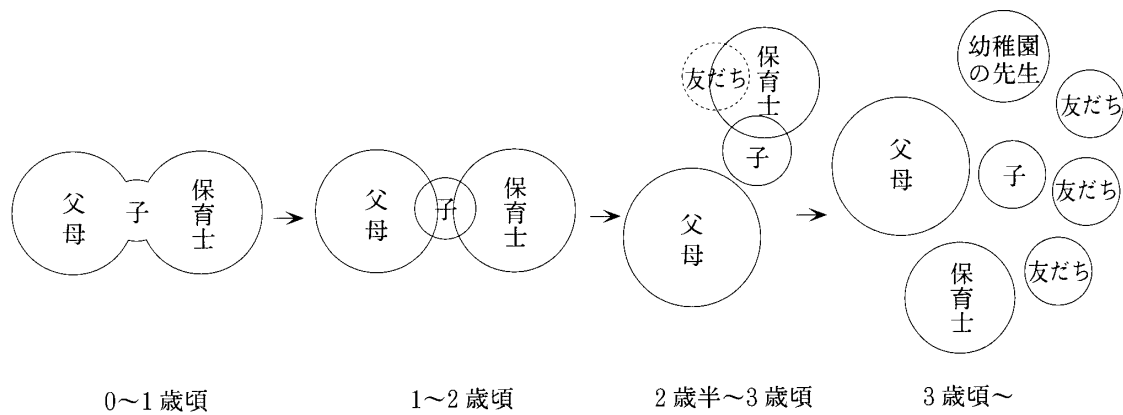


図 2 保育士の描いた保育士像—その 1

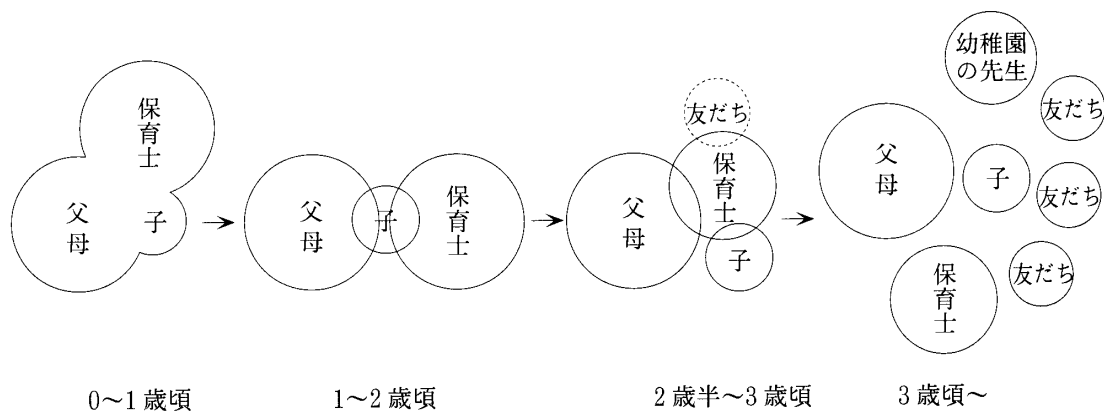


図 3 保育士の描いた保育士像—その 2

② 父母とは離れたスタンスで子どもに接する保育士像

図4、5のように、父母と離れた位置をとる保育士像が描かれている。

図4のコメントとしては「親子関係を作ってほしい時期なので、すこし離れて保育する。」と書かれていた。

父母と離れたスタンスで子どもに接する保育士像を描いたものの中には、図4のように父母から終始距離を置いた図を描いたものだけでなく、図5に描かれた2歳半～3歳頃の図のように、保護者へのサポートを意識したと考えられるような図も描かれていた。

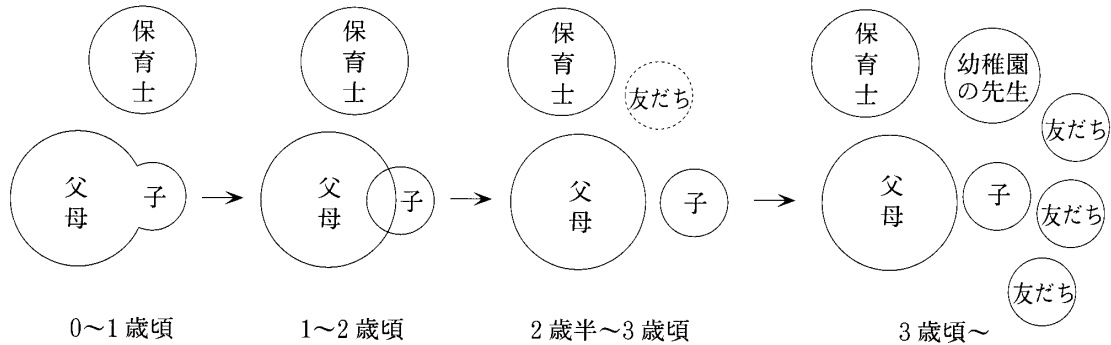


図4 保育士の描いた保育士像—その3

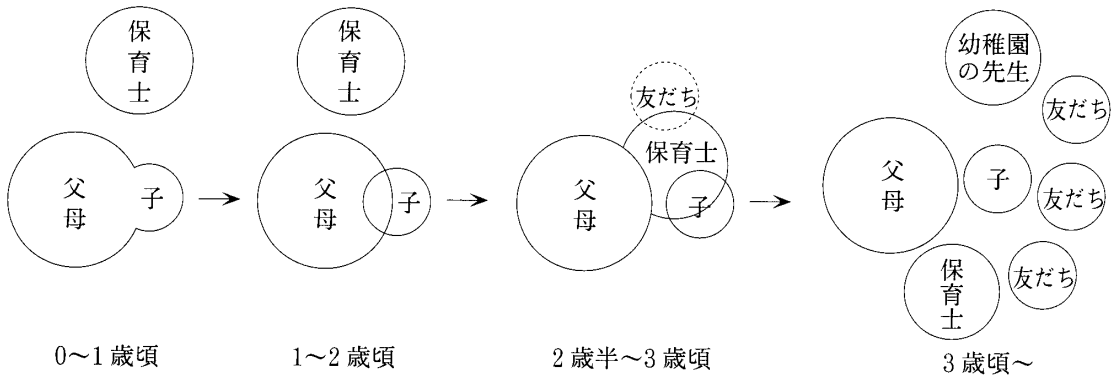


図5 保育士の描いた保育士像—その4

③ 父母も包み込む保育士像

図6、7では父母をも包み込むような保育士像が描かれている。

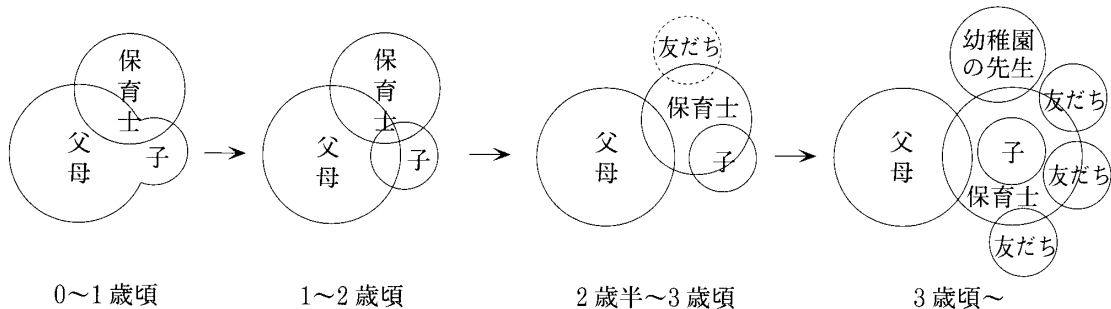


図6 保育士の描いた保育士像—その5

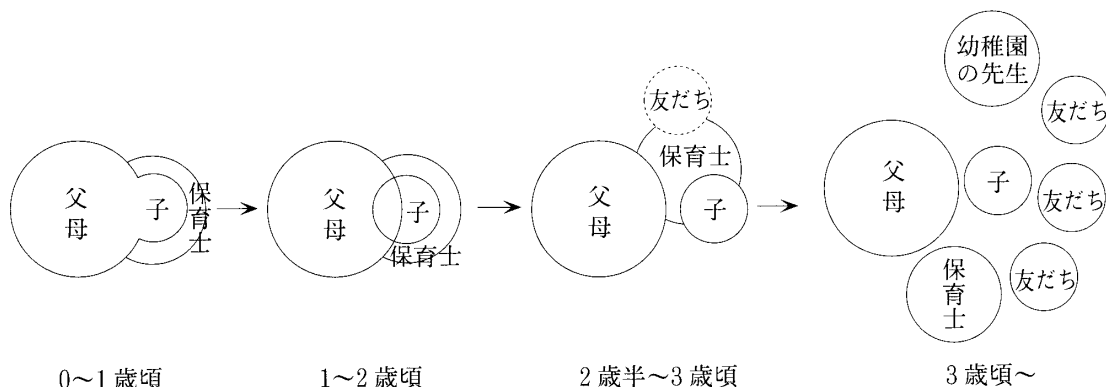


図 7 保育士の描いた保育士像—その6

コメントとして、「母親の代りということで、家庭と園は密着している方がよい。」「保育士は親、子どもと関わるが、子どもの愛着の対象はもちろん親である。」などがあつた。

図 6 においても、図 7 においても、父母と同じスタンスではないが、そうかと言って決して離れた位置に描かれていない点に注目したいと思う。

2) 年度別の保育士像タイプ

次に、年度別の分布をみてみよう。

表 1 2002 (平成 14) 年度中堅クラスの分布

	人数	経験年数	平均経験年数
親と同じスタンス	15 人	7~30 年	20、3 年
親とは異なるスタンス	4	19~28	23、0
親子に寄りそうスタンス	5	14~27	23、2

表 2 2002 (平成 14) 年度園長・主任クラスの分布

	人数	経験年数	平均経験年数
親と同じスタンス	6 人	23~31 年	27、8 年
親とは異なるスタンス	0		
親子に寄りそうスタンス	12	20~32	26、6

表 3 2004 (平成 16) 年度中堅クラスの分布

	人数	経験年数	平均経験年数
親と同じスタンス	14 人	12~28 年	20、3 年
親とは異なるスタンス	6	17~27	23、0
親子に寄りそうスタンス	20	16~31	23、9

表 1 の 2002 (平成 14) 年度中堅クラスの保育士の多く (62.5%) が「保育士のスタンスは親と

同じ」として作図している。それに対して、表 2 の 2002 (平成 14) 年度園長・主任クラスの多くは「親と同じスタンス」(33.3%) より「親子に寄り添うスタンス」(66.7%) を作図している。そして 2004 (平成 16) 年度中堅クラスでは、「親と同じスタンス」(35.5%) より「親子により寄り添うスタンス」(50.0%) が多くなっている。

3 考察

現職の保育士達が描いた保育士像を 3 種類に分類し、その分布を表 1、2、3 に示した。

まず 2002 (平成 14) 年度の傾向からみてみよう。

2002 (平成 14) 年度中堅クラスでは多くの保育士達は親と同じスタンスをとる保育士像を描いており、また、「親と同じスタンスの保育士像」を描いた保育士に比べて「親子に寄りそう保育士像」を描いた保育士の方が平均経験年数が多い傾向にある。一方、園長・主任クラスになると、その 3 分の 1 は「親と同じスタンスの保育士像」を作図しているが、3 分の 2 は「親子に寄りそう保育士像」を描いている。

親と同じスタンスをとる保育士像を描いた保育士は、子どもをとりまく環境が変化し、保育士に課せられる役割がどんどん増加する中で、子どもにとって親と同じ位、もしくはもっと大切な意味をもつ存在としての保育士像を思い、親と同じスタンスの保育士像を描いたのであろう。家庭の教育力低下が指摘される今日、保育士が親以上に子どもと関わる事が要求されるケースも多々存在することのあらわれかもしれない。そして保育者

の熱意がストレートに表された図といえるかもしれない。

しかしながら、子育てする中で親も親になっていくことを考えれば、むしろ少し距離を置いた、もしくは親と異なる姿勢で子どもに対応する姿勢が求められるのではないだろうか。そして、子どもだけでなく、親自身をもサポートすることが保育士の重要な役割となっている現代社会にあっては、親子に寄りそうスタンスの保育士が求められているといえるのではないだろうか。

園長・主任コースの3分の2が描いた「親子に寄りそう保育士像」は、保育者集団で機能する園全体の社会的役割を考えなければならない園長・主任という立場に立って、保育士がどのように子育て全般に手を差し延べることが望ましいのかという観点から位置付けられた保育士像といえるかもしれない。

以上、2002年度の結果から、保育士が経験を重ねるにつれて、また一般保育士から園長・主任という役職に就くことにより、保育士の役割についての考えが変化することがわかった。つまり、子どもの発達を支える保育士自身も変化する、発達するということである。

ところで、2004（平成16）年度中堅保育士の描いた保育士像のタイプをみると、2002（平成14）年度同様、「親と同じスタンスの保育士像」を描いた保育者に比べて「親子に寄りそう保育士像」を描いた保育士の方が平均経験年数が多くなっているが、2002（平成14）年度の結果とは異なり、半数が「親子に寄りそう保育者像」を描いている。

保育所保育指針改訂後の研修その他で、保育者の果たすべき役割を考える機会が増え、年々少しずつ定着してきたあらわれであろうか。子育て支援が単に親を支援することだけでなく、子どもの発達を保障するために親が親として子育てできるように、親子関係が望ましい形で構築されるように支援するという視点への理解が深まった現れであろうか。

Ⅲ 保育者の発達

1 方法

前節で、保育士の描く保育士像が経験年数によっ

て、また園長・主任等園で置かれた立場によって変化することを示したが、いずれにしても、保育者は経験年数を重ねるにつれて、主任・園長等その置かれた立場によって、それぞれに相応しい役割を担っていかなければならないものと思われる。

子どもやその保護者に対して真摯な態度で対応していれば、自ずから相応しい役割を担えるようになるはずであるが、経験を積む段階（経験年数）毎に示されたモデルがある。

Vander Ven が提起した発達段階モデル⁵⁾である。

最後の講義時に、生涯発達心理学では、加齢に伴う量的・質的变化すべてに発達という概念を当てはめることを説明し、「保育者も発達するのですよ」と述べて、Vander Ven の発達段階モデルを紹介した。発達段階モデルを示した印刷物が配布された直後、受講者は奇異な印象を受けたようであった。これまで発達と言えば、子どもの発達のことがテーマになっていたからである。講座では時間の関係もあり、発達段階モデルを示すのみで終わり、受講生各自で考えるよう指示をして講義を終えた。そして、保育士像の作図とともに、Vander Ven が提起した発達段階モデルを見て感じたことも一言述べたレポートを提出してもらうことにした。

2 結果

発達モデルを目にした直後の感想としては、「子どもの発達については一般的に知られているが、保育者の発達段階についてははじめて知ったので驚きだった」、「発達という専門用語のようで身構えてしまうが、成長と置き換えると納得できる」などと書かれていた。

そして、多くの受講者は的確な表現になる程と思ひ、自分がどの段階に位置するのかを考え、これまでの自己を振りかえり納得し、あるいは経験年数から数えて位置すべき段階に至らないことを反省し、欠けている側面の自己分析を行ったようである。

受講生の多くはモデルに自己の個別の経験を当てはめ、自己のこれまでに節目があり、それによって発達してきたことに思いを至らせている。代表的なものを引用しておこう。

表 4 保育者の発達段階モデル (秋田、2000 より転載)

<p>段階 1 新任の段階 …実習生</p>	<p>園の中でまだ一人前として扱われていない。場に参加することから学ぶ段階であり、指示されたことをその通りにやってみるアシスタントとなったり、実際に保育で子どもに直接関わり援助したり世話することに携わる。実践をその場限りの具体的なこととしてしかとらえられず、自分自身の過去の経験や価値判断のみで対処することが多く、子どもの発達からその行為の意味やつながりをみることができない。ある状況で起きた行動の原因や生起の過程をいろいろな視点から説明したり、そこから</p>	<p>対処の方法を構成的に考えていくような探求をしようとはしない。直線的に単一の原因を考えたり (例: あの子が取り乱しているのは、朝家で何かあったにちがいない)、二分法的に判断したり (例: 今子どもは遊んでいるから、学習はしてないのだ) しやすい。 自分の実経験から、先輩の助言に抵抗しようとすることもあり、経験を重視し、子どもと関わるのには本で学ぶ必要などないと考えたり、また本を読んでもそれを実際の保育に応用することが困難である。</p>
<p>段階 2 初任の段階</p>	<p>保育者として周りからも認められ、正式に仕事の輪の中に関わり始め、徒弟制度の中で学んでいくようになる。保育室や遊びの場で子どもに直接かかわる場面で主に仕事を行う。理論や学んだことを保育に生かせるようになってきているが、自分の行った行為の理由や説明を言語化することは難しい。自分の行動や環境設定が子どもの発達を促すことに手応えや誇りを感じるようになり、幼児教育学の知見にも興味を示し始める。 しかし、子供たちや親、同僚など他者の要求にしっかり応えたいという思いから、自分自身を過剰に提供し自己犠牲にしてしまう「救済のファンタジー」現象が生じる。熱意や自発性が保育の改善に寄与することもあるが、一方で子どもへ過剰に注目しすぎたり、援助が必要</p>	<p>な子どもの要求を拒むことができず際限なく自己を与えてしまうなどの問題も起きてくる。新任期ほど個人的な考え方に偏った行動はとらなくなるが、まだ自分の価値体系に依存しやすい。 先輩からの助言や支持を積極的にもとめたり受け入れることで変化することが大きい。助言をうのみにしてしまいがちである。仕事にうちこむほどに何でも役にたちそうな処方箋をもとめるようになるが、その内容を十分に理解しつかいこなせるだけの技能はまだ持ち合わせていない。他者と一緒に仕事をする時には、自分の実際の能力よりも控えめにして周囲にあわせるので、自らの生産性や創造性を感じにくくフラストレーションを感じることも起きるようになる。</p>
<p>段階 3 洗練された段階</p>	<p>保育者としての専門家意識を強く意識し始めるようになり、実践者として自分を信頼し落ち着きを見せてくるようになる。徒弟ではなく同僚として職場での関係性ができるようになる。いわゆる常識や、自分の子ども時代の経験や保育の基礎知識をそのままあてはめたり主観的印象のみに頼るといった次元を越え、現実の事実をよくみることを判断の基礎にできるようになる。だが、まだ保育に直接影響を与えている要因変数を系統的に捉えたり、日常の実践の複雑な要求に対処する点では、完全</p>	<p>に熟達しているというわけではない。よい悪いといった二分法的思考から、現実を事実として評価しそこで役に立つことや自分の負うべき責任を考えることができるようになる。保育の質に関心を払うようになり、子どもと関わる保育だけではなく、親や家族、子どもをとりまく関係性に働きかけることの必要性を認識するようになる。保育者としての自分の能力を認識できるようになるので、自己犠牲的な立場をとるのではなく、肯定的主張的になることができる。</p>
<p>段階 4 複雑な経験に対処 できる段階</p>	<p>より複雑な問題や状況に対処できる知識や経験を得、個々の断片的知識だけではなく、自らの経験ともの見方の参照枠組みが統合されてくる。保育のスペシャリストとして自律的に働くことができる。二つの方向での発達、直接的な実践や臨床的側面より熟達していく方向と、園経営や他の若手教師の教育、助言など、保育に関わる間接的文脈に携わる方向のいずれか、あるいはその両方向に関わるようになる。 直接的な実践面では、子どもの人格をより深く力動的</p>	<p>に読みとったり、また特別な境遇に置かれた子どもや家族へ援助したり、個別の集団の要求に応じるシステムづくりをデザインできるようになる。現象の中にある秩序や規則性をみることができるようになり、相手にあわせながらも自分らしい保育を行うことができるようになり、達成感を得られる。また間接的には子どもとの関係だけではなく、親や社会、行政制度など公的な側面に対し主張的になり、保育を行う財政や経営面にも関わるようになる。</p>
<p>段階 5 影響力のある段階</p>	<p>中年期から中年期後半にあたり、具体的活動は低下減衰する。しかし、それが新たな発達の機会、実践の複雑さや要求を新たな創造的視点から捉えたり、知恵を発達させるのに寄与する。さまざまな事柄を二分法ではなく相乗作用としてとらえ、より抽象度の高い多様な概念とつながりあわせて考えることが可能になる。現場の将来の発展を導くような仕事、子どもや家族の生活に影響を与</p>	<p>える社会的なさまざまな問題についての条件の改善や保護に対し働きかけるようになる。直接子どもに働きかけるだけではなく、親や保育者が参加するネットワークや、その社会文化がもっている信念やマクロシステムを強調し、自分の実践の創り手として主張できるだけではなく、他のスタッフへの責任も負うようになる。</p>

(Vander Ven, 1988 に秋田が要約修正加筆)

① 経験年数 24 年の保育士「新任の頃、言われたことを忠実にただ一生懸命に頑張っただけで保育していた。客観的にみると、当時は深い洞察力はなく、子どもの発達をつなげて子どもの姿を見ることができなかったと思う。それでも大きな問題はなく（あったかもしれないが、自分では気付かず保育してきた）この保育の道を続けていられるのはやはり回りの先生達のおかげだったと思うし、その頃担当していた子ども達には申し訳ない気持ちになる時もある。

その後、少し保育内容を理解するようになり、子ども達の個性や発達にも目が向けられるようになった。しかし、初任の段階は今思うと一番活動的に仕事をしてきた時期だったと振り返る。自分の中で保育内容を色々試した時期であったことも思う。

そして私生活でも子育ての経験をし、子どものことを更に理解し、保護者への対応も少しではあるが、その時に応じた対応も心掛けられるようになりアドバイスのこともできるようになったと思う。しかしそれぞれの段階で子どもと一緒に生活し子どもによって保育者である私も成長してこれたことを忘れてはいけないし、今後も謙虚な気持ちで子どもや保護者とつきあっていきたいと思う」

② 経験年数 19 年の保育士「発達とは加齢により量的質的に変化していくことであるという。その量的質的な観点から、量的には主に技術面の獲得、質的には保育全般に関する理論等の知識の導入とそれを生かした実践と考えていく。就職して 5 年位は保育の中の課題活動に直接活かせる技術の習得を必要と感じ、実技研修等に足を運び、援助というより指導という方に目を向けていた。結婚出産等を経て、子育ての経験を通して母の気持ちの共感、子どもの生活全般の理解も深まり、また夫との協力による家庭作りなどを経験し、技術よりも内面的な理解の高まりの必要性を感じ始めた。出産期も終わり、本格的に復帰となると、今まで得た技術を応用して活かしながら、子どもの育ちの道筋、援助の仕方、内面を知るための文献学習をしたり、研修などに参加し、自分の実践に対しての自信や方向性がつき始めていく。自分としての子ども観、保育観も築かれ始め、それをひとつの目標として保育全般が動き始める。その経

験の中から少しずつ後輩指導の立場にまわり、自分としてだけでなく、園全体の運営という範囲を広げた取り組みがなされていくようになるのだと思う。」

以上の感想文に述べられているように、保育者としての経験と個人的な経験を積むことによって、育てる者もその営みの中で、また、子どもや保護者、職場の人々、家族その他の関係の中で育てられているということに思いを馳せている。

これらは、他の受講生の感想文中の「保育者になりたての頃は『子どもを育てる』という思いが強かったが、経験を重ねるにつれて『保育者は子どもに育てられる』ということを感じた」と、「子どもだけでなく上司、同僚、後輩そして保護者にも育てられていることに気がついた」「しかし一番は子ども達が保育士を育ててくれていると思う」等の表現からも読み取ることができる。

そして、多くの保育者は「周りの人達に育てられ育ち合っていきたい」と考えていることも読み取れた。

ところで、中堅になれば後輩を導くという役割も大切なものであるが、このことに関しても、「後輩達に対しては、このモデルに示された発達段階をふまえて指導することが必要であることがわかった。」等の記述があり、また、「新任で初めての職場の環境は影響が大きいはずだから、中堅保育士の存在も大切であることをいつも思いながら、新卒保育士に接していきたい」「新任にも楽しさを実感できる場を設定しなければと思った」とも書かれていた。

3 考察

以上の記述から読み取れることは、保育士達は日頃、自分自身および保育士の発達についてあまり考えることはなかったが、発達段階モデルを示されたことによって、保育士それぞれが自己を客観的にとらえようとしたことである。そして、あらためてこれまでの自己を振りかえり、周りの人々によって育てられ、また育ちあっていることに気付くことになった経緯である。とりわけ、子ども達が保育士を育ててくれているという考えは、子どもに寄り添いながら、子どもの主体性を尊重す

るという保育の基本姿勢がなければ生まれてこない考えではないだろうか。

しかし残念ながら、誰もが年齢を重ねればこのように発達していくとは限らないのである。保育者として、また人としても成長しようと思う気持ちを持ち学ぶ姿勢が大切なのではないだろうか。

IV まとめにかえて

日々保育を実践している保育士達が保育士の役割をどのようにとらえているのか、保育者のあるべき姿をどのように考えているのかについて知る手がかりにしたいと思い、現職の保育士達に、保育士の役割を図で示すという課題、Vander Ven が提起した発達段階モデルへの感想文を書くという課題を課した。

保育士達の描いた保育士像を3種類に分類し、また保育士像は経験年数や保育所内での位置によって変化することを示した。このことから、保護者と同じスタンスにたつ保育士よりも、子どもと保護者に寄り添って包み込む保育者を望ましい保育者と考えたのであるが、各保育士の目の前にいる子どもや保護者の状況によっては離れた位置をとった方がよい場合もあるだろうし、逆に、保護者以上にかかわらなければならない場合も起こるだろう。したがって、常にどのタイプの保育士でなければならない、どのタイプの保育士が絶対的に正しいというよりは、総じて考えると、現代社会においては子どもと保護者に寄り添うことができ、子ども家庭の状況に応じて臨機応変にスタンスを変えられる保育者が求められているということになるのではないだろうか。

ところで、保育士達に描いてもらった図はかつて筆者が作成した図を基に作図されている。筆者が作成した図は、すべての子どもは生後さまざまな人間関係の中で成長すると考えられるものの、子どもの多くがまず父母との人間関係からスタートさせるということから、父母で代表させた図を作成したものである。しかしながら、時代とともに家族形態も変化していることを考えると、用語等を再考する必要があるかもしれない。また先に示したように、大部分の子どもが3歳までは家庭で育てられる割合が高いことから、子どもが集団生活を体験する場を幼稚園からスタートさせてい

るが、これも、乳幼児が集団保育を受ける割合が増えていることを考えると、修正が必要であろう。今回の資料も参考に、自分・まわりの大人・友達の分化についてさらに考えることにしたい。

次に受講生に提示した発達段階モデルに関してであるが、モデルを提起した Vander Ven は段階1：実習生・新任の段階、段階2：初任の段階、段階3：洗練された段階、段階4：複雑な経験に対処できる段階、段階5：影響力のある段階という5つの段階に分けて説明をしている。II-2で述べたように、このモデルを見て保育士達はさまざまなことを感じ考えたのであるが、比較的経験年数の浅い受講生の一人は「実習生と新任が同じ段階1にあるが、仕事として選んだ新任にはもう少し責任というものができてきているように思うし、そうあるべきだと思う。」との感想を述べている。筆者自身本学の実習生や卒業生、その他の保育者と接する中で、実習生と新任両者に、勉強しよう、学ぼうとする姿勢はあっても、その姿勢は心理的にはかなり異なる部分があることを感じてきた。以上のような発達段階モデルとのずれは、国による保育・教育システムの違い、またその養成システムの違い等が関係しているものと思われる。これらを勘案して保育者の発達に関してさらに考えていきたいと思う。

【注】

- (1) 全国保育士養成協議会専門委員会 2003 保育士資格の研究—政令資格から法律資格へ—その本質を探る—平成15年度全国保育士養成協議会専門委員会課題研究報告(保育士養成資料集38号) 全国保育士養成協議会
- (2) 拙稿 1989 言語の発達と自分の世界の認知の発達VI—M 児の3歳台・4歳台の観察から 友達とのかかわり方・ごっこ遊びの展開を中心に—
- (3) 園原太郎 黒丸正四郎 1966 三歳児 日本放送出版協会
- (4) 名古屋市 2004 子育てに関する意識・ニーズ調査報告書 名古屋市健康福祉局
- (5) Vander Ven, K. 1988 Pathways to professional effectiveness for early childhood

educators. In B. Spodek, O. N. Saracho & D. Peters(Eds.), Professionalism and early childhood practitioner. Teachers College Press.

秋田喜代美 2000 保育者のライフステージと危機 ステージモデルから読み解く専門性 [特集] 保育者の成長と専門性 発達 83 vol.21 48-52 ミネルヴァ書房

Nursery School Teacher's Views about Roles and Functions and the Development of Professionalism in their Field

Narita, Tomoko*

長年慣れ親しんできた「保母」という名称が「保育士」に変更され、児童福祉法の中でその役割が明記されたことに伴い、現在、社会が保育士に期待する役割はかつてない程大きなものになっていると思われる。では、子どもとその保護者に対する保育士の役割はどのようなものであろうか、現職の保育士に図で表わしてもらうことにした。保育士が子どもに対して重要な意味をもっていることはすべての図から読みとることができ、保護者同様の立場をイメージするもの、保護者とは距離を置いた立場のもの等様々な図がみられたが、経験年数を経るにつれて、また保育所内の位置が変わるにつれて、親子に寄りそうスタンスへと変化することがわかった。さらに作図と同時に保育者の発達段階モデルを示し、各自の発達を振りかえってもらったが、保育士達の多くは育てる者も周りのすべての人々に育てられているということに思いを馳せていた。保育士達が今後保育職を継続する上で有意義な作業であったと考えられる。

キーワード：保育士像，保育者の発達，発達段階モデル